

## 大正期の京都画壇におけるフレスコ画及びジョット作品の受容

—土田麦僊《春》（講談社野間記念館蔵）を中心に—

飯田花織（大阪大学）

大正期の京都において、土田麦僊（一八八七—一九三六）、吹田草牧（一八九〇—一九八三）ら国画創作協会（国展）の画家や、官展で活躍した菊池契月（一八七九—一九五五）が、イタリア中世・ルネサンス期のフレスコ画への憧憬を日記・書簡等に残し、その影響が認められる作品を多く描いた。その背景には西洋美術を紹介する美術雑誌の出版と、第一次大戦後の彼らの欧州遊学が存在し、本発表ではこの二点に注目して京都画壇におけるフレスコ画受容の過程を明らかにする。

本発表でまず提示するのは、これまで先行研究において深く考察されてこなかったジョット（Giotto di Bondone 一二六六頃—一三三七）と麦僊の関係性である。大正期の国展画家の間でとりわけ注目を集めたジョットは『白樺』や国展の機関誌『制作』など当時の美術雑誌において盛んに取り上げられた。国展顧問の中井宗太郎や麦僊実弟の土田杏村のジョット論が『制作』に掲載されたことで、麦僊はジョット作品やその精神性に多大な影響を受けることとなる。その影響が顕著な麦僊作品の一つが渡欧前最後の大作《春》（講談社野間記念館蔵）である。本作は大正九年（一九二〇）の第三回国画創作協会展に出品され、当初は地面に座る子供に手を差し伸べる母親を主題とした二曲一隻の屏風を中央に、花々と小鳥を描いた掛軸を左右に配していた。本作の厚塗り表現にフレスコ壁画への志向が、生硬な印象のポーズをとる人物にジョットの人物表現の影響が認められることは、様式のみならず麦僊の妻宛の書簡からも推察できる。先行研究では、多くの展覧会図録にて《春》に対するキリスト教絵画の影響が指摘されているものの、具体的な表現手法や影響元の作品に触れられる機会は不十分であった。そこで、本発表では《春》の描写や麦僊の思想を掘り下げ、作品の意義を再検討したい。

麦僊は《春》発表直後にイタリアへ赴き、京都画壇の多くの画家も同時期に渡欧を経験した。本発表では、彼らの現地での文献記録に目を向けることで、国内美術雑誌からの西洋美術受容と遊学中における西洋美術受容の相違点を示す。現地でジョット作品を中心とするフレスコ画を実見した麦僊や契月らは帰国後、イタリア中世・ルネサンス期のフレスコ画に特徴的な人物と遠景が明確に分離した人物画を描き、壁画的で静謐ながらも明るい色彩を用いた作品を次々と発表する。

しかし彼らは帰国後およそ十年の歳月をへだててフレスコ画的な人物や背景の表現から離れ、白色を基調とした無背景の作品や、東洋の古典絵画に倣った線描主体の「新古典主義」的作画に向かう。このような変遷を麦僊がフレスコ画に傾倒する端緒となったと考えられる《春》を鍵として読み解くことで、大正から昭和期の京都画壇の様相を追い、日本画のいわゆる「新古典主義」の形成にフレスコ画が関わった可能性を試論として提示する。